



Title	キリシタン宗教文献における上位待遇表現の変遷：文法的側面からの検討
Author(s)	白井, 純
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 108: 149-163
Issue Date	2002-12-26
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/34035">http://hdl.handle.net/2115/34035</a>
Type	bulletin (article)
File Information	108_PL149-163.pdf



[Instructions for use](#)

# キリシタン宗教文献における 上位待遇表現の変遷 — 文法的側面からの検討 —

白 井 純\*

## 概要

キリシタン宗教文献は、(サ)セ給フを殆ど用いず、給フと(ラ)ルとの間には明確な待遇意識の差異がある。このことは先に調査した『サントスの御作業』以降の資料にも共通する特徴であり、尊敬の助動詞(サ)スの利用が制限された結果として待遇表現はよく整理された簡素なものとなっているが、待遇表現は単純に主語成分との照応によってのみ選択されるのではなく、漢語系動詞への承接や、自身の活用形によっても影響されると考えられる。

## 1 はじめに

本稿は、『サントスの御作業』第一巻に限って調査した先の拙稿(2001 a)をもとに、調査対象を主要なキリシタン宗教文献すべてに拡大したものである。研究の背景は既に述べたことでもあり省略するが、そこで得た結論は、『サントスの御作業』第一巻が、

- (サ)セ給フを殆ど用いない。
- 給フの待遇意識は(ラ)ルより明らかに高い。

ということに集約される。この傾向は、皇族への待遇に(サ)セ給フを多用し、給フと(ラ)ル間の待遇意識の差異が不明確な中世の軍記物語には見られない

---

\* jshira@lit.let.hokudai.ac.jp

傾向であった。本稿は、この傾向が他のキリシタン宗教文献にも普遍的であることを示した上で、各表現の占める割合の変遷を、出版年代を追って調査しつつ、各表現が用いられた要因について考察を加えるものである。

## 2 資料と方法

対象とする資料は、先に調査した『サントスの御作業(ローマ字本)(1591)』の他、『ヒイデスの導師(1592)』、『コンテムツスムンヂ(ローマ字本)(1596)』、『ぎやどべかどる(1599)』、『どちりなきりしたん(カサナテンセ本)(1600)』、『スピリツアル修行(ローマ字本)(1607)』、『こんてむつすむんぢ(国字本)(1610)』である。出版年代におよそ20年の開きがある。なお、以下では各資料を順に、ST, FD, CMR, GP, DC, SP, CMKと略すことがある。

本稿は上記の影印本を対象に、補助敬語動詞の給フと尊敬の助動詞(ラル)のみに絞って調査している。これにより、敬語動詞単独による待遇や、無標の待遇は除外されるが、尊敬の助動詞(サ)スとの承接についてはすべて網羅し得ている。ここで問題となるのは、(サ)スには使役と尊敬、(ラル)に受身と尊敬、という二つの役割があり、意味が不明になる例が散見することであるが、これらの問題については別に論じたい<sup>1</sup>。ここでは、明らかに尊敬と解釈される(使役や受身とは解釈できない)用例についてのみ尊敬として処理している<sup>2</sup>。また、給フと(ラル)ともに、～給へ、～(ラ)レヨ、という呼びかけや嘆願調の表現については待遇にばらつきが出やすいために除外した。

また、これらの待遇表現によって待遇される主語成分から、神的存在、聖人、聖職者、の3種を取り出し、それ以外を除く。それぞれの主語成分に分類される代表的な内容は以下の如くである。

<sup>1</sup> キリシタン宗教文献の(ラル)における受身と尊敬の問題については、拙稿(2001b)にも論じた。

<sup>2</sup> (サ)セ給フの(サ)セが使役もしくは不明な用例は給フ単独に併せて数えた。

神的存在 — 御主(神), デウス(神), スピリツサント(聖霊), ゼズ  
キリスト

聖人 — アポストロ(預言者), サント(聖人), ベアト(聖人)

聖職者 — アンジョ(天使), 善人, ビスポ(司教), 旧約の神話的  
人物, マルチレス(殉教者)

(その他 — 帝, 悪王, 守護, (その他))

主に『サントスの御作業』第二巻に集中して登場する殉教者を聖職者に分類したのは、同書では殉教者に対する待遇意識が高く、聖職者へのそれに準ずると判断した為である。

以上より、

主語成分 — 神的存在, 聖人, 聖職者

待遇表現 — [敬語動詞] サセ給フ, [敬語動詞] サセラル, (サ)セ  
給フ, (サ)セラル, 給フ, (ラル)

このような主語成分と待遇表現との組み合わせが本稿の調査の基本的な枠組みとなる。

### 3 調査

はじめに、神的存在, 聖人, 聖職者の各主語成分について、給フと(ラル)の関わる待遇表現がどのように用いられたのかを検討する。

神的存在への待遇表現は以下の如くである(表1)。表中の[敬動]は敬語動詞のことであるが、ここには宣フ, 聞コシ召ス, 等の通常の敬語動詞に加え、御おらしよス, 御納受ナス, 等の漢語系動詞<sup>3</sup>も含まれる。

---

<sup>3</sup> ここでいう漢語系動詞とは、通常の二字漢語を動詞化したもののほか、(御)作, (御)感, 等の一字漢語やオラシヨ等の本語を動詞化したもの、および気遣ヒ, 暇乞ヒ, 等を動詞化したものも含んでいる。なお、動詞化はサ変動詞スとナ行動詞為スによる。

表 1：神的存在への待遇表現

	ST	FD	CMR	GP	DC	SP	CMK
[敬勤](サ)セ給フ	0	1	0	0	0	0	0
[敬勤]給フ	11	81	27	22	6	64	12
(サ)セ給フ	0	0	0	0	0	8	0
給フ	521	2156	596	1317	279	2624	227
[敬勤](サ)セラル	0	0	0	0	0	0	0
[敬勤](ラ)ル	38	58	50	18	6	259	13
(サ)セラル	27	6	3	10	2	20	1
(ラ)ル	28	9	8	7	3	55	7

待遇表現の多くが給フ単独であることは明らかであるが、給フ系表現の占める割合は、『サントスの御作業』で85.1%、『ヒイデスの導師』で96.8%、『コンテムツスムンヂ』で91.1%、『ぎやどべかどる』で97.5%、『どちりなきりしたん』で96.3%、『スピリツアル修行』で89.0%、『こんてむつすむんぢ』で91.9%であり、平均で92.7%となる。(サ)セ給フについては『スピリツアル修行』を除いて確例をみない<sup>4</sup>。

スピリツアル修行 164 v-11 御主…元の所に至り給ひ、如何にペアデレ、このカリスを飲まずして叶はぬに於ては、御オンダアデを遂げ給へと申させ給ひ(goVōtadeuo toguetamayeto mōsaxetamai)、又、御弟子達に帰り給ふに、悲しみの余りに両眼重くなりて眠られければ、ゼスス、「汝達何とて眠られけるぞ？ 立ち上がりて番せられよ」と宣ひ、オラシヨ申させ給へば(Oracio mōsaxetamayeba)、アンジョ天下り御力を添へ申さるるなり。

但し、同資料中の8例中6例が上掲用例の前後頁に集中する。また、『スピリツアル修行』では、敬語動詞に(ラ)ルが承接することも多い。代表的なものに(括弧内は用例数)、思シ召ス(42)、知シ召ス(9)、召ス(7)、御上天ナス(13)、御誕生ナス(13)、御作ナス(11)、御堪忍ナス(10)、御納受ナス(6)、御来儀ナス(5)、御来迎ナス(5)、御覧ズ(6)、がある。

<sup>4</sup> 但し、使役あるいは不明の(サ)セ給フは多く用いられており、この表現自体を用いなかったわけではない。

(サ)セラルについては、少数であるが全資料に用いられる。

コンテムツスマン尹 413-6 如何に甘味深き食にて在す御身、即ち天より天下  
らせられ(të yori amacudaraxerare)、かの人々の御養ひとして御身を与  
へ給はんと思し召さるるなり。

どちりなきりしたん 47 オ-13 御主ゼススまことのデウス、まことの人、我等に  
対せられて様々の呵責を受けさせられ(さまさまのかしやくをうけさせら  
れ)、遂に御死去なされければ、これ等の御恩の条々を顧み奉る事、肝要な  
り。

これらはそれぞれ、天下り給フ、受ケ給フ、としても問題の無い箇所であ  
り、ここだけ(サ)セラルが用いられる理由は明らかでない。

聖人への待遇表現は以下の如くである(表2)。

表 2 : 聖人への待遇表現

	ST	FD	CMR	GP	DC	SP	CMK
[敬動]サセ給フ	0	0	0	0	0	1	0
[敬動]給フ	31	12	0	1	2	20	0
(サ)セ給フ	10	0	0	0	0	7	0
給フ	1970	364	52	183	25	920	16
[敬動]サセラル	1	0	0	0	0	1	0
[敬動]ラル	51	2	1	1	2	93	0
(サ)セラル	90	1	1	0	0	25	0
(ラ)ル	169	24	13	3	3	145	4

全体の傾向は神的存在への待遇と似ている。給フ系表現の比率は順に、  
86.6%、93.3%、77.6%、97.9%、84.4%、78.2%、80.0%となっており、  
平均で 85.2%である。神的存在への待遇に比べ、単独の(ラ)ルを多く用いる  
傾向が『スピリツアル修行』を中心として認められる。

(サ)セ給フや(サ)セラルについては、『サントスの御作業』および『スピ  
リツアル修行』では聖人および聖職者を待遇する表現として用いられているが、  
これらの表現は他の資料では殆ど用いられない。『サントスの御作業』と『ス  
ピリツアル修行』とは年代が離れているにも拘わらず、よく似た傾向を示す。

スピリツアル修行 24 ウ-5 サンタマリア…夜昼の御食には御涙を持ち給ひ、我がデウスは何処に在すぞと尋ね給ふべし。かくてい寝給ふ事も無く、休ませ給ふ事も無く (yasumaxetamō cotomo naqu), 三日を明かし暮らし給ふべし。

待遇表現としては一般的に給フよりサセ給フがより高く位置づけられるが、これを神的存在に用いず、聖人に用いた理由は不明である。

但し、(サ)セラルについては、『サントスの御作業』と『スピリツアル修行』とでは、承接する動詞に大きな違いがある。『スピリツアル修行』は、承接する動詞に参ルが多いという特徴がある。

スピリツアル修行 18 r-15 老女のアンナ、不断オラシヨ三昧にしてテンポロに居給ひしが、ビルゼンサンタマリア、御子をテンポロへ連れ参らせられしを拝み参らせられし時の御信心 (Temploye tçuremairaxerarexiuo vogami mairaxerarexitoqino goxinjin), 御喜びを観念すべし。

『サントスの御作業』にこのような傾向はみられない。このことは以下の如く主語成分を問わず共通する特徴である(表3)(表中の数値は、参ル/それ以外、である)。

表3：参ルとの承接

	神的存在	聖人	聖職者
ST	2/25	2/88	2/9
SP	11/9	24/1	3/1

(サ)セラルの使用において、両資料は数値的に相似するが承接の仕方は異なっており、注意を要する点である。

聖職者への待遇表現は以下の如くである(表4)。

表4：聖職者への待遇表現

	ST	FD	CMR	GP	DC	SP	CMK
[敬動](サ)セ給フ	0	0	0	0	0	0	0
[敬動]給フ	7	4	0	2	0	2	0
(サ)セ給フ	14	0	0	0	0	0	0
給フ	615	503	81	322	30	262	54
[敬動](サ)セラル	0	0	0	0	0	0	0
[敬動](ラ)ル	18	0	0	0	0	5	0
(サ)セラル	11	0	1	0	0	4	1
(ラ)ル	233	132	50	59	5	117	11

給フ系表現の比率は順に、70.8%、79.3%、61.4%、84.6%、85.7%、67.7%、81.8%となっており、平均で74.6%である。神的存在や聖人への待遇に比べて、給フ系表現の占める比率は明らかに低下している。神的存在よりは聖人に、聖人よりは聖職者に単独の(ラ)ルが多くみられることから、単独の(ラ)ルは給フに比べ待遇表現としては相対的に低く位置づけられていることが確認されよう。

また、『ヒイデスの導師』以下の資料においては給フ系表現、ラル系表現ともに整理され、(サ)セ給フや(サ)セラルは殆ど用いず、聖職者を待遇する場合には単独の給フか(ラ)ルに限られている。『サントスの御作業』の(サ)セ給フ14例はすべて旧約の神話的人物であるジョセフとその縁者であり、すべて同一の巻に集中することから、むしろこの巻の表現が特殊であるとも考えらる。

サントスの御作業巻二 42-8 ジョセフ…かくてジェッセンに御住居あり、百七年の御齡を保たせ給ひ(tamotaxe tamai)、つひに空しくなり給ふ。かかりしところにジョセフは父の遺言違へじと葬送あらんその為に空しき死骸を携へて、カナンと言へるふるさとへと急がせ給ひける(isogaxe tamaiqueru)ほどに、程無く彼処に着かせ給ひ(tçucaxe tamai)、父の死骸を土葬あり、またエザットに帰国あり、兄弟の人々に心を尽くさせ給ひ(tçucusaxe tamai)、その身も百余の齡を保ち、無常の理を逃れ得ず、朝の露と消えさせ給ふ(qiyesaxe tamō)。



敬語動詞への承接が少ないのは、聖職者への待遇表現として敬語動詞に給フや(ラ)ルが承接した表現は過剰であり、多くが一般動詞に置き換えられるか、漢語動詞であれば「御」を外すかした為と考えられる。

ぎやどべかどる下 58 ウ-12 凡そゼジュンの年齢は、二十一歳に達してより以後なりと雖も、コンヒサンを聞き給ふパアテレの御赦しに任せて(こんひさんを聞き玉ふばあてれの御赦しに任せて)、又其遅速あるべき也。

ぎやどべかどる上 102 オ-1 故は、善人は四海を進退し給ふ如く(善人ハ四海を進退し玉ふごとく)、小事を以ても大に楽みを得給ふものなり。

聞コシ召ス、御進退ス、の如き敬語動詞に代わって、聞ク、進退ス、が用いられている。

上記の如く、全体的な傾向としては『サントスの御作業』および『スピリツアル修行』以外の資料に於ける尊敬の助動詞(サ)スの抑制が顕著である。(サ)セラルは全資料で神的存在を待遇する場合に限って用いられており、待遇の下限が相対的に高く位置づけられていることを確認した。(サ)セ給フは『サントスの御作業』と『スピリツアル修行』に用いられるのみであるから、例外的使用と考えておく。したがって、はじめに指摘した傾向に以下を追加し得る。

- (サ)セラルの待遇意識は給フより高い。

この結論は、二重敬語の一般的傾向に合致しており、何ら目新しいものではない。むしろ、(サ)セ給フや(サ)セラルの使用の抑制こそが、キリシタン宗教文献の特徴である。

## 4 考察

### 4.1 漢語動詞との承接

給フと(ラ)ルのどちらも、一般的な敬語動詞については承接に制限はみられない。例えば(括弧内の数値は神的存在を待遇する、給フ/(ラ)ルである)、思シ召ス(60/84)、知シ召ス(11/24)、御覧ズ(31/11)等は、給フと(ラ)ルの両方に承接している<sup>5</sup>。

ヒイデスの導師 239-2 畢竟デウス、エケレ ज्याを建立し給ひ、それを強め給はん為に、そのエケレ ज्याに対して身命を惜しみ給はざるマルチレスの御証擲に勝りたる事無しと思し召し給ひて(Martyres no goxôco ni masaritaru coto naxi to vboximexi tamaite), かくの如く計らひ給ふなり。

ヒイデスの導師 103-6 デウスの廣大に在す御所は…その上、善人を深く御大切に思し召されて(jennin uo fucaqu gotaixet ni vboximesarete), 忠節をば潤沢に報じ給ふなり。

サントスの御作業巻二 134-24 (サンタ)エウゼニヤ、プロト、ジャシント兩人を召し寄せられ(Eugemia, Proto, Jacinto riônin uo mexi yoxerare), 御主ゼズキリスト、バシラをヒイデスの道に引き入れ給はん為に、この輩を召し寄せ給へば(cono tomogara uo mexi yoxe tamayeba), やうやく時刻近づく事を見知り給ひて、アニマの具足を調べられよと勧め給ふ。

しかし、接頭辞の「御」が付された漢語系敬語動詞(多くが二字漢語に「御」が付される)については承接に制限が認められる。このような動詞は、漢語系語彙をサ変動詞スで動詞化するか、ナ行四段動詞為スで動詞化するかしたもののだが、(ラ)ルはいわゆる漢語サ変敬語動詞には全く承接しない。(ラ)ルが承接するのは漢語系語彙に動詞為スが承接した漢語系敬語動詞に限られ、逆に給フはこの種の漢語系動詞には承接しづらい。(ラ)ルについては、

サントスの御作業巻一 157-1 又デウス、昔サセルドウテの司の装束に十二の名珠を着けよと御下知なされしも(jûni no meixu uo tçuqeyo to go guegi nasarexi mo), これなり。

サントスの御作業巻一 44-13 スピリツサンチ、パアデレ共に、何時までも御進退なさる我等が御主ゼズキリストの御柔和と(itçumademo goxindai nasaruru vareraga von aruji Jesu Christo no gonhûa to), 御慈悲に対して頼み奉るものなり。

の如くであり、給フについては、

サントスの御作業巻一 39-1 サンパウロは御つまゼズキリストに対し奉りて御一世の間、御奉公し給ふなり(go ixxe no aida go fôcô xi tamô nari)。

サントスの御作業巻一 191-8 このサントは御作者を御大切に存ずるやうに

<sup>5</sup> 小島幸枝 1994 では、『スピリツアル修行(ロザイロの観念)』の一般的な敬語動詞に給フと(ラ)ルの両方が承接することが指摘され(pp.131), その理由として、朗読時の響きやリズムへの配慮が挙げられている。

と、よろづの御作の者に勧め給へば、皆々その分いたせしとなり。鳥にも御談義し給へば (Tori ni mo von dangui xitamayeba)、鳥来たつて、聞き奉り、御衣裳を投げかけ給へども、飛ばざるとなり。

の如くである。

この傾向はすべての資料において認められる(表5)(表中の数値は、為ス/ス、である)。

表5：漢語系敬語動詞との承接

表現	ST	FD	CMR	GP	DC	SP	CMK	計
給フ	1/22	12/19	0/4	0/10	1/0	0/23	1/1	15/79
(ラ)ル	47/0	36/0	1/0	2/0	7/0	226/0	5/0	324/0

接頭辞の「御」が付された漢語系敬語動詞につき、(ラ)ルは為スによって動詞化された漢語系敬語動詞にしか承接しない。給フは『ヒイデスの導師』では動詞化の過程を問わず承接するが、それ以外の資料ではスに承接することが多いようである。但し、給フの為スへの承接が完全に排除されたわけではなく、

サントスの御作業巻二 335-4 デウス…イスラエルの人衆の罪によつて、バビロニヤの悪王を以て御折檻なし給ひしが (Babilonia no acuvō vomotte goxeccan naxi tamaixi ga)、その悪王をば国共に、滅ぼし給ふと見えたり。

どちなきりしたん 13ウ-1 中の五箇条は、御主の御パッションをサンタマリア深く御愁嘆なし給ふによて(ふかく御しうたんなし玉ふによて)御悲しみの観念と申す也

の如く少数ではあるが例外的に承接した例がある。

一方、「御」の付されない漢語系敬語動詞については、その動詞化の過程によらず、(ラ)ルが承接することがある。

サントスの御作業巻一 184-4 このサント、三様の門派を建立し給ふなり。一つには、フラデス・メノレスと言ふ、コンテンプラチワと、アクチワの所作を以て談義せらるるなり (dangui xeraruru nari)。

スピリツアル修行 318 r-13 御主は久しくそれら共に御参会なされ、御法談を

聴聞致し、又それらが親類、親しみの内より御主の御弟子となりて御側に堪忍せらるる人もありと雖も (vonsobani cānin xeraruru fitomo arito iyedomo)、何とも御返事を申し上ぐる事の叶はざりし子細は、デウスの御事に心を付けざるによつてなり。

サントスの御作業巻二 132-10 然ればフィリッペ、この由を承り給ひて、先づ作病なされて (mazzu sacubiō nasarete)、その間に持ち給ひたる宝を沽却し、数々のエケレ ज्याと貧人に皆施され、ただ各々にキリシタンのヒイデスを勧め給ふなり。

スピリツアル修行 249 v-3 サントジョセフ、その夜、一宿なされん為に (sono yo ixxucu nasaren tameni)、此処彼処に御宿を借り給ふと雖も、諸方より人々馳せ集まりければ、御宿参らす者一人も無かりし事を觀ぜよ。

この現象は、承接からは全く説明できない。先に「御」の付された漢語系敬語動詞で、(ラ)ルの承接が為スに限定されていたことは全く対照的である。

さらに、単独で用いられたスやサ変動詞にもラルが承接することがある。

ぎやどべかどる下 73 ウ-14 御主キリスト、此御鑑を照らし給ひて、御パッションの最初に、サンペイトロ其御難を除き奉らんとせられし時(さんべいとろ其御難を除き奉らんとせられし時)、御主御親我に与へ給ふ難艱を受けさすまじきとするやと宣ふなり。

どちりなきりしたん 22 ウ-6 御子 ds、人になり給ひ、人間の科に対せられて、クルスにて死し給ふ事は(にんげんのとがにたいせられてくるすにてし玉ふ事ハ)、何の故ぞや。

これらはそもそも、キリシタン宗教文献における待遇表現としては敬意が不足したと考えられるが如何だろうか。

また、単独で用いられた為スにも(ラ)ルが承接することがある。

スピリツアル修行 231 v-2 御主ゼズキリストは、御自由の御上より御所作をなさるとは申せども (govosauo nasarurutoua mōxedomo)、ナツラル道を本とし給ひて、その下地によつて御所作をなさると言ふ儀 (goxosauo nasaruruto yū gui) を觀ぜよ。

但し、大部分は「御」の付された漢語系語彙を直接動詞化せず、助詞ヲを介させた表現であるから、これについては漢語系敬語動詞に準ずる表現と考えるべきかもしれない。

これらの傾向は、先に指摘した漢語系敬語動詞との承接と併せて考えるべ

きだが、キリシタン宗教文献の待遇表現が、待遇意識や動詞への承接といった単独の要因によってのみ決定されるのではないことを示している。さらに検討が必要な課題であろう。

## 4.2 活用形

『サントスの御作業』では(サ)セラルが128例と他資料からみて突出しているが、その多くが連用形であるという特徴がある。

サントスの御作業巻二 71-13 これ真の人、真のデウスにて在すゼズキリスト、御辛苦と御恥辱、クルスの御痛みを堪へさせられ(Cruz no von itami uo coraye saxerare)、或る時は泣き給ひ、或る時は五つのパンにて五千人余りの人に飽満させ給ふものなり。

サントスの御作業巻一 91-25 御主ゼズキリスト、御弟子と共にこのアポストロに見えさせられ(cono Apostolo ni miyesaxerare)、如何に我が親しき知音、我に來たり、汝の兄弟共に我が飯台に座すべしと宣ふなり。

他資料については(サ)セラルの用例が少ないためはっきりしないが、以下に示しておく(表6)。

表6：一般動詞に承接する上位待遇表現の活用形

		ST	FD	CMR	GP	DC	SP	CMK	計
給フ	連用	786	579	220	380	57	908	74	3004
	他	2320	2444	509	1442	277	2898	223	10113
サセラル	連用	111	5	4	9	2	32	1	164
	他	17	2	1	1	0	17	1	39

給フについては連用形の割合が22.9%なのに対し、(サ)セラルについては連用形が80.8%であり、傾向の違いは明らかである。このことは『サントスの御作業』に顕著であって、同資料における給フと(サ)セラルの選択は、活用形に影響されるところもあったと考えられよう。連用形は文の中盤に現れ易く、文の終盤に於ける給フの使用と相俟って待遇表現に多彩さを与えている。

キリシタン宗教文献における上位待遇表現の変遷

サントスの御作業巻二 72-2 まことにゼズキリスト、御親と御同前に初めを知ろし召す諸善諸徳の源にて在すなり。種無くして万像を造らせられ (manzō uo tçucuraxerare), それぞれの徳を以て量らはせられ (tocu uo motte facarauaxerare), 又その届く力をも与へ給ふなり (ataye tamō nari)。一切を御製作なされ、様々の助かる道を教へ給ふなり (voxiye tamō nari)。

ところが、『ヒイデスの導師』以降の資料では(サ)セラルをあまり用いない為、待遇表現について単調になりがちな印象は否めない。

ヒイデスの導師 239-14 マルチレスその苦しみを堪へ給ふ時、デウス、様々の御音信・御寵愛を以て顯し給ふなり (arauaxi tamō nari)。その故は、或る時はマルチレスを苦しめ奉る猛き獣を和らげ給ひ (yauarage tamai), 或る時は猛火を消し給ひ (qexi tamai), 御傷を癒し給ひ (iyaxi tamai), 暗き穴のやうなる籠の中を輝かせ給ひ (cacayacaxe tamai), 手枷・足枷・首枷・鎖を解き給ひ (toqi tamai), アンジョの御手を以て食を与へ給ひ (ataye tamai), 御苦しみの時、力を添へ給ひ (soye tamai), その痛みを宥め給ひ (nadame tamai), 直にマルチレスの心中に在して御利運を開かせ給ふなり (firacaxe tamō nari)。

以上の例文にみられる二つの(サ)セ給フが[使役+尊敬]であることは明らかだろう。

敬語動詞に承接する(ラ)ルや、単独で用いられた(ラ)ルについてはこの傾向が弱まり(表7),

表7：特殊動詞に承接する上位待遇表現の活用形

		ST	FD	CMR	GP	DC	SP	CMK	計
[敬動]	連用	59	26	25	5	5	205	6	331
(ラ)ル	他	48	34	26	14	3	152	7	284
(ラ)ル	連用	210	54	28	30	9	168	16	515
	他	236	111	43	39	2	149	6	586

の如くである。連用形はそれぞれ 53.8%, 46.8%であり、(サ)セラルと同じ傾向と言うには疑問が残る。別の要因を考えるべきかもしれない。

## 5 おわりに

以上をまとめる。

- 『サントスの御作業』第一巻に認められた二つの傾向、(サ)セ給フを殆ど用いないこと、給フの待遇意識が(ラ)ルより明らかに高いこと、については、他のキリシタン宗教文献においても確認される。さらに、(サ)セラルの待遇意識が給フより高いこと、も追加し得る。
- 漢語系敬語動詞については、(ラ)ルの承接は、その動詞化がナ行動詞為スに拠るものに限られており、サ変漢語系敬語動詞には承接しない。しかし(ラ)ルは一般のサ変動詞には承接しており、待遇表現と承接の関係についてはなお検討の必要がある。
- (サ)セラルは、その活用形が連用形をとる場合に積極的に用いられる。連用形は多く文の中盤に用いられ、『サントスの御作業』にみる如く待遇表現の多彩さという効果を獲得している。(サ)スに承接しない(ラ)ルについてはこの傾向が明確でない。

## 参考文献

- [1] 小島幸枝『キリシタン文献の国語学的研究』武蔵野書院 1994
- [2] 白井純 2001 a 「キリシタン文献の上位待遇表現について—— 版本『サントスの御作業』を中心として——」『北海道大学文学研究科紀要』104
- [3] 白井純 2001 b 「助詞ヨリ/カラの主格標示用法について—— キリシタン文献を中心として——」『国語学』52-3
- [4] H.チースリク・福島邦道・三橋健解説『サントスの御作業』勉誠社 1976
- [5] 鈴木博編『キリシタン版ヒイデスの導師』清文堂 1985
- [6] 松岡洸司・三橋健解説『コンテムツス・ムンヂ』勉誠社 1979
- [7] 近藤政美編『ローマ字本コンテムツス・ムンヂ総索引』勉誠社 1979
- [8] 天理図書館善本叢書『きりしたん版集一・同附録』天理大学出版部 1976
- [9] 豊島正之編『キリシタン版ぎやどべかどる 本文・索引』清文堂 1987
- [10] 小島幸枝編『どちりなきりしたん総索引』風間書房 1971

キリシタン宗教文献における上位待遇表現の変遷

[11] 林田明 『スピリツアル修行の研究 影印・翻字篇』風間書房 1975